

夢を与えられるような仕事をしたい。

竹村 栄朗

(代表取締役 / 営業兼社長)

「自分でハンドリングし、工場、お客様に対して、責任をもって仕事ができることにやりがいを感じています。また、その中での新しい発見や出会いがものづくりの力となっています。」と語る竹村代表は、これまで生産管理、営業など、現場を知るため幅広い業務に携わってきたそうです。「お客様の要望をできる限りくみ取り、常に求められている物以上の仕上がりを目指しています。そのためには妥協はしない。手を抜きません。細かくお客様の要望を聞き、妥協せずものづくりに取り組んでいます。」

工場の一角に整然と並べられた何百ものリベット打ちゴマは、こだわりの証。「何でもやるから増えていったんだよ。」そう語る竹村代表の顔は、職人としての誇りに満ち溢れていました。

今後は、海外ブランドなども手掛けたいと思っているそうです。「日本とは発想が違うところも多いため、斬新なデザインを投げかけられて、どう対応できるかが楽しみです。」



もっと生の声

Q & A

— 実際に「発想をカタチに」した例を教えてください。

人がジーンズを履いてかかんだ状態で、手にペンキを付けて、ダメージ加工を施したこともありました。海外の軍隊のパラシュートから、靴や洋服を作ったこともあります。諦められていることや、ゴミ箱に捨てられているような発想をカタチにしている、皆に夢を与えられるような仕事をしたいです。

— 仕事をする上で大切にしていることはありますか？

関わりのあった岩手の会社が東日本大震災で被災されたことがありました。被災当初はミシンもないような状態で気を落とされていたので、「何とか復興してほしい」と、こちらからミシンを送って説得をしました。今では幅広く業務を行い、活躍されています。色々な人の、色々な思いが形になって、ものづくりは完成していきます。お互いに協力し合いながら良いものを作っていくということは、私がいつも大切にしていることです。

— 思い出に残っていることを教えてください。

異業種から今の業界に入って間もない時、生デニムと、防縮加工したものの違いがわからず、生デニムを製品洗いたら10%縮んでしまい、大人サイズのものが子供サイズになってしまったという苦い思い出があります。今となっては笑い話ですが、当時は苦い思い出でしたね(笑)。